

交通反則告知書・免許証保管証(番号 5C 455437)

告知・交付日時 昭和 60年 9月 25日 午前 1時 20分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 高井ア 番52 稲垣田哲也

交通反則告知書・免許証保管証(番号 5C 462354)

告知・交付日時 昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分

告知・交付者の所属階級等及び氏名 西新井警察署交番直足立高井

(1) 反則者名 生年月日 明大昭61年10月5日生(18歳)

本籍 東京都足立区伊国田前沼1210

住所 東京都足立区伊国田前沼1210

免許証 第57年12月18日 公安委員会交付

保有者は又登録する者先 氏名 () 住 所 金額

(2) 反則事項 (印で記入) 大型車 普通車 二輪車 原付車 自営業用

反則事項 (印で記入) 乗合三輪車 二輪車 小型車 特種車

登録(車両)番号 5C40VT558 号

(3) 反則日時 昭和 60年 9月 18日 午前 4時 13分ごろ

(4) 男(女) 男 東京都 足立区 相田7-19

(5) 反則事項・罰金 (印で記入) 罰止場所 (柱) 第一法定 指定 () 著習長の交通規則

反則事項・罰金 (印で記入) 交差点1 (柱) 横断歩道1 () 自転車横断帯1

反則事項・罰金 (印で記入) 交差点2 (柱) 横断歩道2 () まがりかどから2 () 横断歩道3 () 銅鑄から3

反則事項・罰金 (印で記入) 自転車横断帯の (前) 銅鑄から3 () 停留 () 所の 標示 (柱) から5

反則事項・罰金 (印で記入) 罰止場所駐車 () 第一法定 () 指定 () 著習長の交通規則

反則事項・罰金 (印で記入) 消火栓から (4) () 大火警報機から (5) () 指定 () 著習長の交通規則

反則事項・罰金 (印で記入) 左側地所駐車 () 第一法定 () 指定 () 著習長の交通規則

反則事項・罰金 (印で記入) 制限駐車時間超過 () 時 分間超過 時 分間のところ

反則事項・罰金 (印で記入) ベーキングメーターが作動されていない場合の駐車 ()

反則事項・罰金 (印で記入) 地上停車場が一杯だなごとくすぐり歩道に

補足欄 (印で記入) 上げいはしらか→移動料金11,200円を支払った

不注意による確認義務不履行119の2-II追加 () 法定禁止場所 () 有償運送等の手数による禁止制限

2 この納付箇所は3枚1組となっていますから3枚とも納付場所に提出してください。

納付区分 (印) 本指

知通告示 昭和 60年 9月 18日

納付場所 日本銀行本店、代理店又は倉庫代理店・郵便局

納付期限 昭和 60年 9月 25日 限り

納付期限後に納付することはできません。

現金、小切手、券、収入印紙などの郵送は受け付けていません。

告知・交付日時	昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分
告知・交付者の所属階級等及び氏名	西新井警察署交番直足立高井

免許証古	(1) 反則者名 生年月日 昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分
(8) 出頭日時	昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分

告知・交付日時	昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分
告知・交付者の所属階級等及び氏名	西新井警察署交番直足立高井
(1) 反則者名 生年月日	明大昭61年10月5日生(18歳)
(8) 出頭日時	昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分

告知・交付日時	昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分
告知・交付者の所属階級等及び氏名	西新井警察署交番直足立高井
(1) 反則者名 生年月日	明大昭61年10月5日生(18歳)
(8) 出頭日時	昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分

告知・交付日時	昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分
告知・交付者の所属階級等及び氏名	西新井警察署交番直足立高井
(1) 反則者名 生年月日	明大昭61年10月5日生(18歳)
(8) 出頭日時	昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分

告知・交付日時	昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分
告知・交付者の所属階級等及び氏名	西新井警察署交番直足立高井
(1) 反則者名 生年月日	明大昭61年10月5日生(18歳)
(8) 出頭日時	昭和 60年 9月 8日 午前 4時 30分

内訳 移動措置料金 6,000円
保管料金 2,000円
昭和 60年 9月 18日

行者警視庁 西新井警察署長 氏名 警視山本政喜
付期限 昭和 60年 9月 25日

若付期限後に納付するにはできません。
現金、小切手、券、収入印紙などの郵送は受け付けていません。

免許証記載の住所

西新井警察署

6681

★音なしい人たち・go 上目黒住区センター いつまで続く
10月26日(日) P.M. 1:30~5:00 いつものメンバー

★10月19日 ギャラリー葉 パフォーマンス P.M. 2:00~6:00
(10月13日~25日 荒井真一個展期間中)南青山2-2-15☎475-483
田中トシ・谷川より・荒井真一・原田修三郎・乙部聖子・福本健修

わたしはワープロが嫌いだ。ワープロを全面的に否定するというわけではないが、ワープロは必要以上に普及していると思う。ワープロは、以下に述べる諸条件にあてはまる人だけが使っていれば良い。1. 他人が容易に判読できる字を書けない人。2. 自分が書いた文書をどうしても手元に残しておき後々までも、時には手直しなどして慕しみたいナルシスト。3. いつも膨大な文書に埋れて、整理が追いつかない人、或いはその状態にある事が快感になってしまった人。4. とにかく電子機器が好きでたまらず、何かスイッチやらボタンをいじくりまわしていないと落ち着かない人。（例えば、こういう人は仕事場でパソコンやワープロを使い、帰宅前にゲームセンターに寄り、家ではファミコンやってヴィデオソフトをダビングする。一種のエレクトリック・フェティシズムである。）5. なんでもいいから自分の書いた物を活字の様な字体にする事にあこがれる印刷物崇拜者。6. 他人の書いたものを体裁整えてたくさん作り、金を貰う商売、つまり印刷業。要するに専門家と病気のひとだけが使っていればよいのだが、わたしの疑問と不安はこの日本に、そんなに多くの専門家と病気のひとが居るのかということだ。（勿論、兼ねている場合もある。何かの専門家である事がピョウキを助長し、その逆も成立つ。一般に我々は常に何らかの病的徵候を持ち、また何かの専

門家でありつづける。）そんな馬鹿な、という人もあるでしょう。ええ、そうですよ。わたしは極端な事をいってます。しかし実際のところ次の二点を考えざるを得ない。一、システム化、OA化の部分としてのワープロ以外の、いわゆる民生品、あるいは家庭用ワープロはファミコンと同じ運命にある。それは出生時から定まっていた。つまり「つくられた需要」、「見せつけられた欲望の対象」である。新製品というものは、我々が欲する物では無く、「彼等」が売りたい物なのだ。日本語にワープロは不要だが、ワープロは日本語を必要としたのだ。二、日本語が基本的に表音文字のみでは記述され得ないと考えれば、アルファベットの様なタイプライター化、デジタライゼーション（ここでは限定して、あらゆる表記を単純な幾つかの記号の組み合わせ、あるいは均質な操作に還元していく事としよう。。）はその言語の性質の変化・変質を待ってはじめて可能になったといえよう。この変化・変質は非常に長い期間を経て達成された。その主な点をあげれば、以下の様になるだろう。
1. シラブルの減少。2. 言語使用における加速化。3. 単語の増加、新生の多様化。4. 漢語の持つ歴史的広がりと意味の過剰性が減じていること。5. 印刷物の質的・量的な必要性の増加。といったところだが、例えば、5においては単に情報産業の発達ということだけでなく、社会のあらゆる側面でのシステム化と官僚化が進行していることが、その根底にある。ワープロは文書官僚主義と、印字崇拜、規格化信仰に奉仕し、一文字あたりの価格をひき上げ、よりコトバと記述の「差延」をうみだすことになる。しかも「差延」は自己増殖し、我々はそれを止める術を持たず、代りにひたすらそれに対して不干涉であろうとするのだ

わたしは、自分がワープロフォビアである事の告白をするより先に、ワープロがもう一度提示してみせるテクストとエクリチュールの斥力、「差延」の暴力的増殖にまた目をつぶらなければならないことを怖れ、あるいは其の事態がまさしく眼前約30センチの画面から生起するという機会（機械）にマゾヒスチックな興奮を感じているのだ。磁気テープやフロッピーディスクに記録された磁束密度の変化、ブラウン管上の走査線、塩ビ盤上のインヴォリュートする小峡谷、画布上の顔料と油脂による電磁波の波長調節、こうした次元においては情報は無く、単にマテリアリティのみが配置～空間の支配～されている。これらが情報として読まれる為にはマテリアリティの自足を越えて、異なる系の間に関係性が生じているべきだ。「べきだ。」という表現になるのはこの関係性を核として機械状の欲望～欲望する機械としての情報機器が頭われるからだ。そして一方では原型フェティシズムより分化したマシナリーフェティッシュあるいはエレクトリックフェティッシュがアミーバ（運動するもの）として機器（危機）の彼岸へと触手をのばしてくる。触手がキーボードに達し欲望を欺いて情報に自己を投射するのは時間の問題である。（キーボードには御存知のとおりコード～暗号がならんでおり、バレットには絵の具がならんでいる。これを「配置された恣意性」といってよい。）アミーバがキーボード（またはバレット）を覆いつくすと配置も恣意性も不可視となり、ヴィジョンのみがさまよいあるく。この「さまよい」を我々は「初期の自由度」とよぼう。一般にいう表現や解釈の問題はこの範囲で起こるといってよい。しかしそれは決して単純な問題ではない。何故ならば、事の契起は我々がマテリアリティ～配置を「空

間の支配」から「意味の支配」へすりかえる（象徴化しようとする）時点にかかるてくるからだ。既にこの時、「初期の自由度」から逃れでた『機器とフェティッシュの接合体』（ドゥヴニールといつてしまいたいところだが・・・。）は切れば血のでる生身の体でありながら、欲望の彼岸でチェシャー猫の笑いになっちまってやがる。行為の結果としてのエクリチュールを読むことは常に差延化した二重性をはらんでいる訳だが重要なのは、まさしくこの二重性の源たる主体の意識の微分的変移が無意識化（あるいはラカンに反して無構造化、波風たてぬならアモルフといいたい）していくことである。しかし、ここにこそ「成熟した自由度」の可能性も潜在している。それは以下にのべる理由による。（上記の）『接合体』はコードを覆いつくすことによって自らブラックボックス化していくが、その代償として顯性的な強度を失う。（ウィリアム・パロウズはカット・アップをワープロでおこなうだろうか？）機械の内部を支配する言語は合目的的であるが、自然言語はトランスクレーションによって形成された過剰性がメタ言語となるシステムをもっている。言い換れば後者には使用価値と交換価値があるが、前者には使用価値しか無いという事である。また前者においては、過剰性はエラーとして「誤一機能」する。自然言語における「誤一機能」は『反技術』化、コンテクストのメタ化を主体に気づかせる。これは前述の「微分的変移」がメディア（マテリアルな、フェノメナルな、パラメトリック・システム）の関与により変節～主体の疎外～を余儀なくされている、ということだが。メディアはディスタンスを顕微鏡的に拡大する事と、望遠鏡的に縮小する事を同時に同現場でおこなっている。

<前ページ最終行からの行換え無し>「数分的変移」はディスタンスの加速度的伸縮の中でゼロへと収束していく。もしこれが逆に無限大へ向けて振動はじめたら、あるいはディスタンスの伸縮と同期する変化率を持てば、メディアの拘束力は無化する。例えばシャーマンはトランスにおいてメディアとしての身体を再構築できるし（それ故シャーマンはメディア～靈媒たりうるのだ。）、非イディオマティックな志向の即興演奏はメディアとしての音楽を批判する可能性を持ちうる。（アート・リンクゼイの非分節的ギター、AMMのスタティックなノイズ・・・）しかしそれらの例は主体への疎外を全面的に退けて「反一技術」のみによって成立しているわけでは無い。主体は分節化されつづけているのであり、「数分的変移」が脱属領化したかと思うと次の瞬間には再属領化されてしまう、という「せめぎあい」の場としてあるのだ。この「せめぎあい～メタ・レベルの浮上」をこそ「成熟した自由度」とよぶべきだ。実はここまでが疑似言語代償装置としてのワープロ批判の序章である。

（わたしは以前書いたスケルトン・クルーに関する評においても、自己流の疎外論に基く展開を試みたがその時点で経験したのは記述をすすめていくにつれて、自明であったはずの主体と疎外の関係性が曖昧になっていきそれらを巡る言説自体もなにかモヤモヤしてくる様であった。しかしその状態から抜け出すと関係性は新たな様相と意味を帯びて見えてくるのだった。その変化を一言でいうならば、「たしかにシステムとテクノロジーは主体を疎外する。しかし主体とは疎外されることによって顕われるものである。」ということだ。少なくとも俗流ナチュラリスト、えせヒューマニストの懷古的・楽天的・復権論的レベルと同一視さ

れずにいるためには、この問題を強調してしすぎる事は無い。言語をはじめとして、あらゆるもののがシステムとテクノロジーに支えられている。スケルトン・クルーとは別の意味で「もたらされたもの」としてのワープロを批判しなければならないのはこの理由による。）

(続く)

- ・横浜ポートシティ(小栗半蔵)を藤沢遊行寺で小栗再生の場では百人の坊主の声明かつとひうのひ見にいくか若居の始まり前に20人位の続経があったたけでたまたまされた。内容も忠実に再現されたは説教節で役者の個性も仮面によじ消されセリフもうますまで教科書を読まされているつまら子を感じた。昔ながらのアンダーハーテンとはいふ夢一族のようなエネルギーの方が樂しまれた。・で「風の旅団」(火の鳥)は悲しいかなつまら子がつた。役者これぞれの役どころか中途半端で話も表層をなさないほどのまかれてのよう消化不良。
- ・ピナバウシェ&パパタル舞踏団のダンスとパフォーマンスの往来は悪くない。暗黒舞踏的振りは食もなからぬ、TVで山海塾を立ちとやかたけこと今たりこれで、たこの番組はN・J・Pの企画たしか何とか知らないけどひどいが、たるーりーにか出てて驚いたけど(もう驚くことでもないか)、「小杉武久川に元竹田賀一」後半食もな 小杉さんのハイオリンは美しい。絶妙な五との飲み屋での木氏の芸を楽しむ、公民館運動衫並・場所の打ち上げではM氏の芸を楽しむ、音の上手な人かうらやましい。音らしい人たゞよ、乙部・谷川・荒井トリオ面白かった(自画自賛)こういう形のものはやはり時間の制約を考慮しない方がいい。

○7月12日、「もうひとりのアリス」(16mmフィルム、高野達也、千秋健)(GESOやが P.E. '86. 6月号)「触れこむ」。映画として見こしまるが、精神疾患者の像といった一面はあまり意識にはなかった。勿論最初はこうしたセシューション的な興味もあるが、いかば映画を見ることで支居に引き込まれてしまう。支居の演出がエリ。俳優の素質のある患者が熱演して、クライマックスになる。映像は支居の内容を忠実に伝えたドキュメンタリー的なもの。後半、先が当たります。暗闇にかくれてしまつた俳優の姿を、近づきカメラが凝視する場面があつて、思わず、「闇を生きこむ」といった毒のある表現行為がおのづかしいと思ひ、感服した。

○7月30日、「海辺のホーリー」(35mmフィルム、エリックローメル) 夏の日射しが妻い。ややハイテな白っぽい画面で、赤や緑の原色が映える。膝で切れたある人物の構図。さういふでなく、名人芸的とさすがれたカメラ、シナリオから大きく離れてくる。一員のバカラスのありきたりな物語など、登場人物の性格が日々確かなめ立つて、人間関係がつまり、ドラマが進行し、事件が解決する。後半は、事件を回想した登場人物達の述懐もある。人生の断面がきめ立つてく。夏の開放的なイメージが、これまで鮮烈だった例は稀だ。まぶしいハイターの先。別荘の扉が始まり、扉で終める完結された構成。人間関係のドラマなのに、全くペッソーレしない。題材のせいかねがなく、やはり監督のエリック・ローメルの資質なのだろう。夏のバカンスの甘くせつない余情性が、安らぎのドラマを墜すことなく、人生の断面を垣間見3老練な認識へと昇華していく。

○8月30、31日、「サン・ソレイユ」(35mmフィルム、クリスマルケル) カメラワークは、商業的カメラによるさざなぎとした撮り方で、見やすい。カットイン(編集)の複雑さが難解だ。そして、かげぞりセリフと音と、画面の対応で、新たな意味が生じる。セリフは文学的。日本についての文明論的部分はまあまあ。日本とアフリカ、遠い2つの在編集で簡単につなげてしまつて編集至上主義のノルマだ。カットの直列ヒビのつけ方で、混沌としたモザイクのようになつていいのが良い。

○9月10日、[山本公成、ジョンゾーン、河瀬勝彦] ブラズっぽいのか傷がかかる。退屈はしなかった。ジョンゾーンが「実戦的の吹ききもつたのは面白い。」[金一玉](舞台、7月の日本舞新派の支居でモズキ、古井舞踏を改良した創作舞踏だといふが、なかなかスタイルがきまらない。メリハリもないので、格好いい。)「よくよした山中トトロ霜田親二とかの舞踏とは比べるすべもなく、スマートで、すきりして、ダイナミックで、

スペクタクルだった。」「ちよぐさよした分がなければ、自分とは世界が違うと思つた。○9月12日、「草と草紙」(8mm→16mm、福田克彦) 三里塚に住む84歳のあればドキュメンタリー。8mmで撮った接近したカメラがいい。小川プロ、「日本古屋敷村」と同じようだ。農業、作業の手順を緻密と、解剖学的に追つていくのが面白い。ドキュメンタリードラマからぬ加藤泰みたないローアングルで、手の動きと草の高さから捉えのがわくわくする。一人の人間が年齢を追う作り方で、しかもこの人生が元々固有の地圖で、波乱万丈なものなり、毒氣がある。『土の行進』(三里塚)→3.8mm、福田克彦)も同じように、排水工事の手順を追つてく密着した8mmがいい、機動隊と衝突する場面の同時に銀音画面も、緊迫していた。

○9月14日、「六ヶ所人間記」(16mmフィルム、倉岡明子・山野伸貴) 既成のドキュメンタリーの域を出でたくて、退屈だった。訪問している、インタビューするという古めかしい方法論。提问方も政治的で、被体面の人へ会ったときの興味の域を出す。生活を追つてもいまひとつ外面向的だった。『草と草紙』のような密着した身体性に到達していないかった。

○9月13日、「天使」(16mm、パトリック・ボウフスキ)。2回目だから、今回も感心しなかった。面白くないのだ。所轄は、ステル写真のコマ撮りで、再撮影にすぎない。現実世界との直接的な衝突、応答、やりとりがあのどけない。ステル写真を自在に操作して、精密な機械的モザイクを作り上げたわけではない。現実世界を切り取つてくのが映画の出発点だというのだ。無機的な感触が残り、不快だった。

○9月14、15日、「時を数え、砂漠に立つ」(16mm、ショナス・メカス)。メカスの映画のリズムが体にまで込まれて、終わって後、1~2時間の余韻が抜け出せなかつた。現実はともあんなはずはやくないし、重くもあり。映画で作り出したメカスの理想的な映像の形なのだろう。全てが美しい。泣ないはこのものを撮つても美しい。ピノホツがソフトフォーカスのようだ。すればせんじンシング、コマ撮り、コマ落とし、すばやく露出変化など。絶えず変化しながら時流していく映像の時間。あり変化しつづける時間は、良質の即興演奏が到達したとき感じられたと同質だった。全てが文豪的イメージでくまれ、全てが余情的だ。叙情的なことハナパニー、信頼がふさわしきよろこび、力づけられ、はげまされこころ

うな気分になら、くる。叙情的の物を見、物を語ることの「ロバガニア」を感じようか。ピノケモ、露出変化も、コマ撮りも、2重写しも、ハイエンドも、全て計算づくこや、こゝのたとえ付いた。『あらめ、好み加減いやこころのこ』はなり。この場、この時、メカスが瞬発力ももく、眼前の光景の最も気になる美しい形を、気軽にスピーデ操縦で切り取るのを。気にいるランボルーノのようなカメラをあわつメカス。ほとんびりカメラと一体化して、映画の自動機能にならったかのようだ。瞬発的の反応し、動いてくメカス。旁人ではない、撮り手の被写体は、喜びしげな表情、リラックスした表情が多く、ナチュラルで、上向きが多く、空がたくさん入っている。開放的な気分になる。うれしさは詩的な気分になる。メカスのランボルーノが体にきさまれるのを慣れてからは、どうふるさと込まれてしまう。自分の眼が、映画の中を自由自在に動いてくれるかのような陶酔境に入れた。移動とも、叙情的で美しく、生き生きとした動きの世界が抜けてはず。外の街中がニューヨークに見えてしまった。

・9月16日、「自己切歎」(16mm, キュスター・ブルス) 自分の傷口も広げていくマン"ヒストリック"快感。G.ブルスがマンヒストリックなのに比べて、オットー・ミュールは肉体に対するサディスティックな点が異なると思った。

・9月21日、「山谷、やそれともヤリカえせ」(16mm, 佐藤清夫, 山岡強一)
〈P.E. '86.2月号「己部氏が、3月号「GESO」が融れていた〉労働者達の集団の人々をもう一度見えていくカメラが走る、ほのけど面白か、走。闘争がなく、工場現場で働く姿も撮る、こゝのが面白い。宴会の時の労働者の表情もいい。しかし、後半、放逐まで行くのは映画のイメージを壊している。(寄せ場の歴史的探査といふ意図は理解できるが……) 寄せ場のこゝれいコンクリートを背景にした労働者の怒りを抑えた表情と罵声がこの映画のゴツゴツしたメイニマージーなの……。もっとアクションがあるのかと期待していたが、どうでもなく、手配師の詰め書き場面が主だった。構成が散漫さも目立つ。イメージ的には悪々しいのか良い。この手のドキュメンタリーを見る時には、「映画を見ただけ」「自分は参加しない」という安心な「お勉強の傍観者」の立場になりやうが、この映画にはそれを搖さばく荒々しさがあ、走。監督が2人とも殺されてしまう危険を現

場からほほと遠い安全圏に自分がいることを、強く意識させられた。上映場所の部署解説セミナーといい、上映後の「差別話といふ『労働者』」についての講演といい、船本三川治への言及とその著作といい、無知な僕たちは十分おさしがな非常だった。ここで、この儀物もも過去形で標準化しようとやく安心するひ弱な自分がいるのだった。

・P.E. '86.9月号(先月号)には、「僕が己部氏のフィルムへの底辺」における己部氏からの返答があったが、「己部のコーナー」一番下の行)、系内得できることはありますし、しつこい点もある。「あらめ物を客観的に見なれば、この世の中に気持ち悪いものなどいろいろものはない」という思想は、僕が己部氏のフィルムの中にも発見した「認識論とイメージが走っている」あたりつながりと思う。用義かと思ふ。これでもせなり、「これでは何故己部氏はあのように被写体を選ぶのか? 選ぶ時の基準は何なのか?」という疑問が湧いてくる。己部氏のフィルム製作時の内面の吐露を聞きたいとも思うが、いま言葉をかねて見つめようとする予想もある。いずれにせよ、僕は偏見と変態でこり固まつており、J・ターレル衣のようなナチュラリストがけほと遠いよろこび。

〒662 兵庫県西宮市甲陽園西山町5-30 (0798)71-5310 大谷淳

空間恐怖症の癖あり。余白があるとつい何か書かずにはいられない。もったいないという感じでもある。部屋においても同様で、いろんなものがちりかっている。でもたまにかたづけると気持ちいいとも思う。映画においても同様で、淡々とした風景、シンプルな映像にあまり興味をもてない。映画はいつも箱のようなものという思いがある。僕は単純な人物なので、単純に驚かせてもうとうれしい。美しいと思われているだけの対象を見ようも醜い(と思われている)ものを見せつけられる方が僕はうれしい。

☆ P E の T S 氏のコンセプチュアル・アートを見て、昔書いたメモを思い出しました(同封のコピー)。もうやめたいとは思っているのですが、今でもチケットとか半券をときどき保管してしまうのだった。

☆『エイリアン 2』を観た。面白い。シガニー・ウィーバー(だっけ?)カッコイイ! それから、『死靈のえじき』を観たことは手紙に書き忘れてたけど、あれは確かにボリシーがあって良かった。納得できる終末觀。『エイリアン』でも『死靈』でも、出てくる男は総じて情けなく、悪夢に悩まされながらもそのネタと闘って克服するヒロインの勁さが目立つってのは最近の傾向みたいね(「女性映画」と評する人もいたな)。『エイリアン』のほうは話自体は単純明解で、アクションとバイオレンスに徹してたけど、ランボーだのロッキーみたいな米国万歳主義が無い点は気持ち良い。『ターミネーター』に近い壮快さ。(同じ監督の作品であることを後に知った。……どうりで最後に生き残ったマザー・エイリアン(?)のしつっこさもターミネーターに似てるわけだ。)

☆『フィメール・トラブル』は『ピンク・フラミング』に較べれば、ストーリーも描写も普通っぽかったが、ディヴァインの魅力で楽しめた。彼(女)が、クリシュナに入信した自分の娘を「気持ち悪いね!」などと罵倒しながら絞め殺すシーン(思わず溜飲が下がってしまったところをみると、僕はクリシュナさんが嫌いらしい。)だと、ライヴで「誰か芸術のために死ねるかい?」と尋ねて「死ねるとも!」と応えて立ち上がった観客を即座に射殺するシーンだと、喜々として電気椅子で処刑されるラスト・シーンだと、気に入った場面はいっぱいある。(2番目のシーンに続くパニック・シーンで、「観客を殺傷したのは駆け付けた官憲どもで、ディヴァインは最初の1人を撃っただけだ。」と、サヨクの Y K 氏はサヨクらしい指摘をした。なるほど。)

☆倉橋由美子『アマノン国往還記』: SFとしては陳腐なアイディアだと思うが、“ニガヨモギのインクで書いたような”手だれの文章で一気に読ませる。／A. ウイル, W. ローセン『チョコレートからヘロインまで—ドラッグカルチャーのすべて』: 良いドラッグ・悪いドラッグという区別は無く、ただドラッグの良い使い方と悪い使い方があるだけだ、という、まーあたりまえと言えばあたりまえのことを主

僕も竹筒・チランなどの保管瓶あり。コピーを見て思い出しキヤハの切符で東京路線地図を作製していたものを探ししから行方不明。

15年位前に買ったドクタマグをまた読んでない。埋もれています本は他にも多い。本をオフショアにして偏愛する癖あり。今や利用する図書館はひとつになつてないが、当然すべてを読み直していくわけではない。

張している。意識を変えたいという欲求は正常だ、どんなに法律で規制しようとドラッグ使用が無くなるとは考えられない、だったら、正しい知識に基づく正しい使い方を親も子供も勉強して、ドラッグと有意義なお付き合いしましょうよと、プログラマティックにデモクラシックに啓蒙していく、いかにもヤンキーのヒッピー上がりが書いたって感じの本。ケッ、ほどほどに終始して面白いから、ただ酔うために酔ったっていいし、乱用して死んだって別にいいじゃねーか、と言いたい気もするが、ミもフタもない考え方ですいません。ちなみに、僕はマリハナよりタバコのほうを好み、最近はフィッシュヤーマンズフレンドという辛いミントキャンディの中毒で、よく酒で風邪薬を飲んだりしますが、適度にシャブをたしなむほうがヘルシーだらうか。／赤塚不二夫他『フォーカス・フライデーの愛読者に贈る本』: F・F・Eを批判する各界著名人のコメントを集めた本。個々の発言内容は大同小異・異口同音で、弱い者いじめ・人権侵害・品性下劣・報道の逸脱・死者への冒涜・報道の自由の履き違え・ジャーナリズムの堕落・etc... (正論の罠み掛けというのも、意外に疲れる。) ともかく、作るほうにも喜んで読むほうにも非があること、良くも悪くも最も現代日本のメディアであること、は言えそうだ。有効な批判手段としては、読まない・買わないに尽さると思う。僕は正義感からというんじゃなくて、写真が面白くないから、ほとんど見てない(キャッシュンは、写真はどうせ無関係だと割り切っているし、十中八九、読むに堪えない文章なので、ほとんど読んだことはない)。買ったことはなく(拾ったことはあるな)、読むのは喫茶店ぐらいです。／『ダブル・ノーテーション No.3』: 浅田氏は性能のいい要約機械だ。60年代へのノスタルジーが坂本氏と平井氏との緩衝として機能している。大里氏のページには誤植が多い。それにしてもスノップな作りだぜ、etc... 古本屋購入価格700円相当の感想。／遅ればせで読破した『ドグラ・マグラ』はどうして期待したほど面白くなかったのか、とか、現代詩はなぜつまらなくなつたかを考察する荒川洋治(もつまらないが)。『すばる』7月号)。それを引用して「問題のない時代」(冗談でしょ。)を語る高橋源一郎(っていいと思う?)と川崎徹(飽きた。)の対談(『広告批評』8月号)・P E 17号、etc... を読んで言葉と即興について考えたこと、などは、次回元氣があつたら書くつもりですが、今日はもう寝よっと。

19860910

10月13日(夜9時~11時)下北沢ラジオ・ホームラン

大里俊晴、小山博人、鈴木健雄、園田佐登志、藤本和男

《四分五裂放送局》

「音なしの人たち」をサボって行かなかったり、なかなか怠慢な日々を過ごしていたのだった。『ドグラ・マグダ』を読了したり、深沢七郎の最近のエッセイを読んでしまながったりしたのだが詳しいことは忘れた。掛けついでに2本の映画を観る。R・ヘルが出てるというだけの理由で観た「スマサリーンズ」はやはりそれだけの好戯的な価値しか無かった。全編に流れます「トイズ」や「フーリーズ」の曲が82年製作というこの映画の古典的パターンによる退屈な作風を救っているわけではなく、むしろ強調している。今のパンクが観ても呆木立のではないが。それと比べれば79~80制作の「デクライン」の方がしくり来る。こちらはL.Aパンクシーンのインディーを混じえた純全のドキュメント。娛樂しようと思って観てもかなり笑えておもしろい。それはコミカルなのではなく、また逆の理由によるのだが、レコードを聴く限りでは「普通のハード・パンク」に思えて退屈だった「ブラック・フラッグ」などが、妙に生き生きとしていて(?)かなり見せる。「サークル・ジャーナル」の「世界最速ドラミング」は爆笑ものだ。やはりハード・ファ・パンクはスポーツなのである。一部の好戯家には「ジャームス」や元スラッシュ編集長の「カリック・ディシプリン」のメンバー、「アリストバーグ・バンド」の後に「ガングラブ」となるリズム・セクション等、「LAFMS」由縁者の活躍(?)を見る貴重な記録としても楽しめる。「フライヤー」や「X」がカッコ良かった。今のパンクがボコボコ殴られるライバー・ケンカシーンには驚く。しかしこんな映画を観てしまう私はつくづくロック界についてうれしく思はず。先日CNNで伝えていた「ロック・フェスティバル」で「暴動」の原因が、フェスティバルへの「ラモーンズ」の飛び入り、というのは笑えた。アメリカ人っておもしれーや。

9月に聴いたレコード：先日父親のそくなった原雅明に借りたシド・バートの「ブートレグ」「Tattooed」。ライバーのところが「かっこ良い」。J・ケジ(朗読)とD・キュードルの「59」の2枚組。「ある日イサム・ノグチが『我が家にやって来て、部屋には家具が無く、片隅にちびけた革鞄があつておを見てビューティフルと言った』」といら日語のようなことを喋っている。ベルベットのMAY'S ライバーがすり減ってしまったので同じレコードをもう一枚買う。ところで昔武蔵美に顔を出せなくなったら夏芸術祭があり、僕はシーレ根の自画像とドローイングを出したところ感想)ト(笑)に「河合の絵はおもしろい。でもそれだけ」と書かれ、その人には心当たりがあるのだが、しかし本当にそれだけなのだから仕方ない。P.Eに対する批評の一節にはこねと似たところがあるような気がするが(肉厚ないが)少なくとも僕に聞こへては音楽などに対する態度は上記のように以前から貫いており、若干自嘲的に言えば「それは『ホーリッシュ』であろう。(たぶん①氏が職業上レコードに関して書いていたことも近いように思う)ただこれにも少なからずある種の努力がつきまとうことは強調しておきたい。

NHK土方夏の番組「人生とは即興なのだから取えてそれをやる必要はない」という発言が気になった。フジテレビで始めた金曜夜の番組、タイトルは忘れたが浅田彰の第一回はマスケだった。ガタリが出来るというので観たが、冒頭の長ったらしい意味不明のビデオ・アート(?)で嫌になり途中で消す。テクノロジーに因して謙虚の無いオブキミストぶりに腹が立つ(ここもいかが)。またルサンチマンのネタが増した(笑)。最近夜中に中矢君のバイト先へ行って世間話をするのが日課のようになってしまった。我ながら暇なやつだ。

・「小栗判官・照手鏡」それだけでも非常に楽しめる音楽、美しさ、謹いと基本にしてと思われる

癡声の確かさ、ペリ島のそれこそそくりとしたさのある後面の上出来さ、だがそれが一体何になるというのだ。(私にとっては)一矢の感動もない。劇中、小栗が「食飽病み」となって現れる、かわいらしい語感のあか抜けに場内に笑いの声く... カヤニ=ライ痴病とはこれらどうも切れせぬ、お上品さ。昔今のが結びがいい... 美い(?)か、摸倣(?)に不惑症な私。・ピ・ハウシェ舞踏団(予想外にも)前評判どおり衝撃的。シャツズビヤセティックリカレでコミカルで。セリフなのにドラマチック。男女が抱き合ひ族互に相手を壁にぶつけあう。1人の女と10人ほどの男が扇とまみ太股をさすり抱き合ひたりを繰り返す。金員が観客に背を向けて椅子に座り、それと「マガモ」一日」というような映画を鑑賞しながら見る。お互いを写しあしてホラリードを観客に配つてみる。舞台上有る實物木馬で遊ぶために観客にコインを貰つたら。(のみ金は返してもえられたのかどう)・木佐貫邦子「A Piece of Peace」13人の裸(?)がまぶた(?)を濡らしていく。赤や女性の鮮麗と木佐貫のヌードがそれの肉体が作成みたい。が、平和というテーマ、どうやれたらうまい? と。少女たが肩組みあわせて音楽にのって首を左右に廻したり、おこうぎの時間で踊る心のせに気持ち悪いのはあたしの偏見はピストル86という国際平和年10月卒業の企画の一環としてあるが、その企画にあわいくなってくると、あるいは「年輪」というテーマと並んで、星川芳美と木下邦子と巴川のピザ・パフォーマンスだった。ピストルを鳴らしてヨーロッパを走るマントをぐるぐるまきにあれて、人間が家畜に変わつてしまひる。パフォーマンス部分は木場のやたらの大きさは迫力なくしてしまった感もあるが、大画面で写したときはビデオだ、参入客院も良美あり。「つま黒猫(なんかいいらない)のゆめ(序曲)」会長制殺傷劇に「こういふと平和」というセリフ 加のひさる等危険に堪能的だ。これが悪知らずで観客ならともかくも「1万人の参加者がつりあげろ」という前宣伝(実際には千人ほどいたようだが)某宗教団体が後援についているらしい催し「平和を体感」してやつてきた(信)音に向けたものだけに(手ももあがた)その動作に驚嘆。なぜか? うに「やりたい人は本気でやつてさう」との信条のやつがいる。だから特に席を立つ人はゐなかつた。(平和)ねは別に信者ではなく、平和にも興味はないけどオオコチ株式会社44、うち、たかいいつたよ(自己紹介)(野球のやつが興味深い)。